

要旨 Abstracts

ワークショップ Workshop

教室で如何に効果的な多読指導を行うか

How to Implement and Practice Extensive Reading in Class

講師：高瀬 敦子 TAKASE, Atsuko：関西大学・関西学院大学・甲南大学非常勤講師、国際多読教育学会(Extensive Reading Foundation)理事

言語学習における多読の必要性を最初に説いたのは 20 世紀初頭の Harold Palmer や夏目漱石でしたが、国内で多読が注目され徐々に教育機関で導入され始めたのは 20 世紀も終わりに近づいてからです。今世紀に入り全国的に急速に多読が広がり、私立中高大のみならず公立中高でも多読を導入する学校が増えてきました。ところが、多読が英語力向上に必用不可欠であると理解しても、実際の指導法がよくわからないから導入しにくい、あるいは導入したものの学生が本を読まない、英語力向上が見受けられない等々の声をよく聞きます。そこで、当ワークショップでは、まず初回の授業で実施する多読導入時のオリエンテーション（多読の説明・必要性・目的・効果等）を行い、その後、ご出席の先生方に実際に多読を体験していただき、多読記録の取り方や効果的な読書法を説明し、多読後に短時間で行えるアクティビティーや人気の図書を紹介いたします。

略歴： テンプル大学にて英語教育学(TESOL)博士号取得

多読指導歴：土佐塾中・高等学校（高知県）にて、長期休暇中の多読導入

梅花中・高等学校にて年間を通した多読指導実施

大阪国際大学・近畿大学・関西大学にて多読指導実施

テンプル大学大学院にて多読を中心としたリーディング夏期講座担当

現在は関西大学・甲南大学にて多読指導実施中

研究分野： 英語力および情意面に及ぼす多読の効果、効果的多読法、リメディアルクラスにおける多読の効果等を調査・研究し、国内外の学会にて口頭発表、及び国内外のジャーナルで論文発表

著書： 『英語多読・多読指導マニュアル』（大修館書店, 2010）

シンポジウム 1 Symposium 1

海外研修プログラムを活用したグローバル人材育成の試み

Fostering Global Citizens through Study Abroad Programs

講師：中田 葉月 NAKATA, Hazuki：大阪教育大学大学院教育学研究科院生

辻 和成 TSUJI, Kazushige：武庫川女子大学

SMITH, Craig：京都外国語大学

中田 葉月 NAKATA, Hazuki : 大阪教育大学大学院教育学研究科院生
大阪教育大学フィンランド (EU) 海外教育実習 2014 Overseas Teacher Training in Finland (EU) ,2014,Osaka Kyoiku University
「大阪教育大学フィンランド (EU)海外教育実習 (JASSO 日本学生支援機構採択プログラム)」は11月から12月にかけての2週間、海外で教育実習を行うプロジェクトです。面接を通過した院生や学部生の異学年メンバーが、CLIL (内容言語統合型学習) の理論を応用し、主に理数等の授業を英語で発信する取り組みとなっています。 平成 26 年度は 12 名の学部生と院生がフィンランドのユバスキュラ大学と小学校、オーボアカデミー大学附属実習校、スウェーデンのキューラビック基礎学校を授業訪問し、た「表面張力」「コンデンサー」「日本文化ソーラン節」「もったいないは地球を救う」「対称図形と家紋」の5つの実習授業を行いました。 その取り組みを紹介させていただきます。
大阪教育大学大学院教育学研究科 (修士課程) 在籍 寝屋川市立小学校教諭、寝屋川市教育研修センター専門員、同指導主事を経て、現在、寝屋川市教育委員会指導主事 平成 22 年度大阪府優秀教職員等表彰を受ける。小学校教諭時代は、学級担任や国際コミュニケーション科担当として外国語活動を実践。昨年度より大学院にて「CLIL フレームワークを使用した、児童の思考を促す外国語活動」について研究している。 平成 26 年「大阪教育大学フィンランド (EU)海外教育実習 (JASSO 日本学生支援機構採択プログラム)」参加
辻和成 TSUJI, Kazushige : 武庫川女子大学
日米キャンパス連携グローバル教育 One University, Two Campuses: Constructing Academic Initiatives Across Borders
武庫川女子大学は米国ワシントン州スポケーン市に 1990 年米国分校(MFWI)を設立しました。英語文化学科 (大英) と 2 年制の英語キャリア・コミュニケーション学科 (短英) は、この米国分校と有機的に連携した英語教育・グローバル人材育成を実践しています。MFWI は広大なキャンパスを有し CEA*認証を取得しており、規模・質とも日本屈指の海外分校です。大英では、学生全員参加の 4 ヶ月間の MFWI 留学と希望者を対象に更に 4 ヶ月間の MFWI 留学を実施しています。そして、高度な英語運用能力と異文化理解・活用力を有し、国際的に貢献できる自立した人材の育成を目標としています。また、短英では学生全員が 4 ヶ月間 MFWI に留学し、実践的な英語力の習得を目指します。さらに、日米キャンパスが連携し実施している「日米企業研修プロジェクト」に参加することにより、キャリアに対する意識と知識の向上を図ります。 *米国の大学英語教育認定協会
略歴：武庫川女子大学教授。英語文化学科学科長。豪州クイーンズランド大学大学院修了。 研究分野：ESP(特にビジネス英語)、会議通訳等。 著書：『企業・大学はグローバル人材をどう育てるか (共著)』(アスク出版, 2012)

SMITH, Craig : 京都外国語大学

Innovative Co-Curricular Study Abroad Programmes for University Students: Enriching Academic Studies through International Experiential Learning Opportunities

Three compulsory co-curricular short-term study abroad programmes for university students which have been developed since 2010 by the Department of Global Affairs at Kyoto University of Foreign Studies will be described. The programmes are linked to courses in the curriculum in the fields of International Relations, International Business, and courses which analyse poverty-reduction initiatives. Students have opportunities to use their English language skills by adding to their vocabulary and by developing intercultural communication sensitivities. Success depends on students' willingness to engage in self-regulated learning. The outcomes to date and future development plans will be discussed.

Craig Smith is founding Chair of the Department of Global Affairs at Kyoto University of Foreign Studies. He is Advisor to the Department of Student Affairs for experiential learning projects. He has often participated in overseas curricular, co-curricular, and extra-curricular academic events and community-engagement projects with university students. He is a founding Faculty Advisor of the Japan University English Model United Nations and an Advisor of the Asia Youth Forum. He is particularly interested in the ways that participation in low-cost, short-term international events may promote vocabulary learning by encouraging self-regulated learning.

シンポジウム 2 Symposium 2

英語リーディング研究最前線：リーディングのしくみに関する研究とその実践への応用

State of the Art in L2 English Reading Studies: Research on Reading Mechanism and Its Practical Application

本シンポジウムでは、日本人英語学習者の英語の読みのしくみを明らかにする基礎研究から、実践研究までの線上にある3つの研究を紹介し、意見交換の場としたい。まず、英文を読んでいる時の、視線の動きから、日本語母語話者が文構造の異なる英文をどのように理解していくのかを考察する。次に、単語を正確かつ迅速に読む力の重要性について報告する。最後に、初学習者のためと考えられがちな多読活動による4技能指導を提案する。

司会・講師：川崎 眞理子 KAWASAKI, Mariko : 高崎経済大学

講師：野呂 忠司 NORO, Tadashi : 愛知学院大学・大学院客員教授

講師：中野 陽子 NAKANO, Yoko : 関西学院大学

中野陽子 NAKANO, Yoko 関西学院大学

視線計測による英語の関係節付加曖昧構文の理解過程の研究

読みは読んでいるテキストに書かれている情報を統合していく処理過程という一面がある。テキストは

複数の文から構成されている。テキスト内の1つの文を処理する際、先行する部分から読み取った情報はどのようなタイミングで影響するのかについて、関係節の先行詞となる名詞句が複数ある文を刺激として英語母語話者と日本人英語学習者について調査を行った。文処理中の判断については視線計測による課題を、処理終了後の判断については質問紙による課題を用いて調べた。本発表ではその結果を報告する。

エセックス大学大学院 博士 (心理言語学・神経言語学)

専門分野：心理言語学、文処理

著者： *Second Language Sentence Processing: Psycholinguistic and Neurobiological Research Paradigms*. In R.R. Heredia, J. Altarriba, & A.B. Cieslicka, (Eds.) *Methods in Bilingual Reading Comprehension Research* (Forthcoming, Springer Science)

川崎真理子 KAWASAKI, Mariko : 高崎経済大学

ディコーディングのフルーエンシーと音読のフルーエンシー

読みの入り口であるディコーディングについて小学校から成人英語学習者までを対象に研究しているが、リーディング指導は、文の処理以降の過程に焦点が置かれがちである。そもそも文字を音声化するスキルは十分だろうか。1語を音声化するために1秒も費やしたのでは、読むという行為は成立しない。即ち、単語を知らない、文の構造がわからないという以前に、文字を音にできないことが学習者にとっての大きな問題だと考える。中級以上の英語力を持つ学習者でも、ディコーディングに問題を残しているのはなぜか。英語の音や文字のしくみがもたらすむずかしさや不十分な指導に起因すると考えられる学習者の現状を十分に理解し、真の識字力を養うために適切な指導方法を考える。

関西学院大学大学院修了 博士 (言語コミュニケーション文化)

高崎経済大学、東洋大学、芝浦工科大学非常勤講師。大阪市英語イノベーションプロジェクトアドバイザー。

著書：『英語音読指導ハンドブック (共編著)』(大修館, 2012)

野呂忠司 NORO, Tadashi 愛知学院大学・大学院客員教授

本発表は大学でもっと「多読に基づいた4技能を伸ばす英語教育」を実施してはどうかという提案である。大学での多読指導は、一部の外国語学部、国際文化学部等の英語を重視する学科でなされる以外、研究発表から判断すれば、remedial教育として行われる、英語嫌いの学生に対する動機づけとしてなされる、ことが圧倒的に多い。多読のような易しい教材を読んでも英語力はつかないと主張される先生方も多い。英語を正しく読む力をつけることは大いに賛成であるが、もっとレベルの高い学生にも、2時間の英語の授業を1時間、いや45分でも割いてはどうかという意味である。最近の学生は口頭でコミュニケーションできる力をつけたいと思っている。そのような学生に多読に基づく他技能の指導で満足させることができる。1) なぜ多読が必要なのか、2) 多読で他にどのような技能を伸ばすことができるのか、3) どのように4技能を伸ばすのか、について提案する。

愛知学院大学大学院後期課程満期退学、博士 (文学)

専門：英語教育

著書：『英語リーディングの認知メカニズム (共編著)』(くろしお出版, 2001)、『これからの英語学力評

価のあり方 (共編著)』(教育出版, 2005)、『英語のメンタルレキシコン (共著)』(松柏社, 2003)、『英語リーディング指導ハンドブック (共編著)』(大修館, 2010)

研究発表・実践報告 Research Paper/ Practical Report

研究発表 Research Paper

研究発表 1 日本語 Research Paper 1 (Japanese)

島村 東世子 SHIMAMURA, Toyoko

大阪大学 Osaka University

非常勤講師 単独

理系研究者による英語での Q&A セッションへの対応プロセスと、質疑応答指導の提案

How Scientists Handle Q&A Sessions and What They Propose as Effective Teaching Methods

昨今、国外のみならず国内でも英語での研究発表が増えている理系研究者にとって、英語でのプレゼンテーションスキルは必須となっている。しかし、英語でプレゼンテーションを行うことはノンネイティブスピーカーにとってチャレンジングなタスクであり、特に、予測できない質問に英語で対応しないと見えない Q&A セッションは、発表者にとって最大の難関と言えるであろう。そこで本研究では、英語での質疑応答力を高めるための指導内容とその方法を探ることを目的とする。具体的には、グループインタビューにおいて理系研究者 7 名に対して、「Q&A セッションをどのようにとらえ、どのように対応しているのか?」、「英語での質疑応答力を育成するにはどのような練習をすれば良いと思うか?」などの質問をし、その回答データをもとに、英語での質疑応答力向上のための指導案を考察する。

研究発表 2 日本 Research Paper 2 (Japanese)

蔦田 和美 TSUTADA, Kazumi

京都産業大学 Kyoto Sangyo University

実学講師 単独

クリティカルライティングにおける辞書使用の効果—理論と実践

Effects of Dictionary Use on Critical Writing -- Theory and Practice

グローバル社会において E メールなどの文字言語によるコミュニケーションが重要性を増す中、産学連携を踏まえて大学でのライティング指導に注目をする。まず辞書使用の理論とプロセスに関する先行研究を精査し、その上で upper intermediate レベルの日本人大学生を対象に実践を行い、ライティングにおける辞書使用実態とその効果を検証した。ライティングのテーマは時事問題とし、辞書使用、不使用の条件下で書かれた英文を各々エラー (語彙、構造、スペルミス、語法、品詞など) および流暢さ (単語数) に関して分析をした。またグローバル人材として重要なクリティカリティ (テーマに関する意見の表明) をオリジナルのルーブリックに基づいて比較した。対象レベル学生においてはおおむね辞書使用の効果が見られた。以上の分析、比較に加えて学生へのアンケートにより判明する辞書使用による心理的影響なども整理し、今後のライティングにおける辞書使用指導に関する一考察とする。

研究発表 3 英語 Research Paper 3 (English)

MATSUNAGA, Mai 松永 舞

京都産業大学 Kyoto Sangyo University
専任教員 単独
A Survey Study on English Proficiency and Teaching Skills for Teaching English in Japanese Elementary Schools
小学校英語活動における指導者の英語力と指導力に関する意識調査
<p>This study examined the results of a survey that targeted public elementary school teachers (n=80) and explored their self-evaluated perceptions of current and desired levels of English proficiency (6 levels) and teaching skills (4 levels). English proficiency consisted of five domains: listening and speaking, grammar in speech, pronunciation, reading, and writing. Teaching skills consisted of four domains: overall teaching skills, adjusting to students' level of English, use of classroom English, and, fluency in conducting activities in English. Moreover, the desired level included two situations, solo- and team-teaching situations. The overall results showed that gaps were found consistently between the current and desired levels both in English proficiency and teaching skills, showing higher levels for the desired. Between the desired solo- and team-teaching, solo-teaching tended to show higher levels in English proficiency and teaching skills. These results suggest that the participants evaluated their current levels of English proficiency and teaching skills inadequate to teach English to a sufficient level, especially when they have to teach by themselves. They also feel the need to improve their English proficiency and teaching skills in order to teach more effectively. Considering the future path of English becoming required for the 3rd and 4th graders and becoming a required subject for the 5th and 6th graders, systematic support for teachers provided by the MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) seems warranted based on the results in this study.</p>
研究発表 4 日本語 Research Paper 4 (Japanese)
本田 隆裕 HONDA, Takahiro
神戸女子大学 Kobe Women's University
専任教員 単独
リメディアル教育におけるコピュラ文指導法の再考
A Reconsideration of the Teaching Methods of Copular Sentences in Remedial English Language Classes
<p>コピュラ文は中学校英語の初期に学習する基本的な構文であるが、この構文を正しく理解していない大学生が一定数存在する。これらの学習者には、コピュラを欠いた文や <i>happied</i> のように誤って形容詞に過去時制接辞をつけてしまった文が見られる。そこで、本発表では中学校英語を復習するリメディアル教育の場においては、コピュラ文を過去形から指導すべきであると提案する。Nishiyama (1999)は分散形態論に基づき、「山が高かった。」のような過去形の文においては <i>be</i> 動詞に対応する形態素 <i>-ar-</i> が現れるが、対応する現在形の文では分散形態論における <i>Fusion</i> により音声的に具現されないと指摘している。このことから、コピュラ文を現在形から指導することは、<i>played</i> よりも <i>went</i> という過去形を先に指導するのと同様であると言え、コピュラ文については敢えて過去形から指導する方が正しい理解につながると言える。</p>

研究発表 5 英語 Research Paper 5 (English)
MARLOWE, J. Paul マーロー ジェー ポール
神戸大学 Kobe University
専任教員 単独
Measuring the Effects of Sentence-based Writing Practice on L2 Writing Complexity and Quality
センテンスレベルにおけるライティング訓練の有効性：第二言語によるライティングの複雑性と質にもたらす効果について
<p>Current practice in L2 writing instruction is based primarily on a process approach that has devalued sentence composition in favor of higher levels of discourse. However, the sentence is still the most fundamental unit by which writers express thoughts. Still, many L2 writers lack the complexity to effectively express their ideas. Therefore, extensive practice in form-focused sentence writing might be a necessary precursor to enhancing the range, fluency, and complexity of writing output. The purpose of this presentation is to share data from an ongoing pilot study that measures the effects of sentence-based writing practice on the development of Japanese university students' writing. This one year pilot study focuses on comparing the effects of sentence-combining, grammar-translation, and fluency writing practice on measures of syntactic complexity and overall writing quality. Using a quasi-experimental design, the study addresses the following research questions: 1) To what degree does participants' written English syntactic complexity change after receiving the experimental treatments over one academic year of study?, 2) Do changes in syntactic complexity lead to changes in overall writing quality?, and 3) To what degree do the treatments and overall quality of writing correlate? The presenter will share preliminary results which indicate that sentence complexity changes occur first at the clausal level, which are often not detected using global indices such as T-unit measurements. Furthermore, the presenter will discuss some of the issues encountered in regard to the research design, development of the treatment materials, methodology, and data analysis.</p>
研究発表 6 日本語 Research Paper 6 (Japanese)
竹蓋 順子 TAKEFUTA, Junko
大阪大学 Osaka University
専任教員 単独
大学生の英語受容語彙の知識に関する諸問題
Issues Regarding Japanese College Students' Knowledge of English Receptive Vocabulary
<p>小中高の英語教育ではコミュニケーション力の養成が重視されているが、依然としてリスニングに苦手意識を持って入学してくる大学新入生が多い。そこで本研究では、語彙に絞り、文字と音声で提示された場合に、どのような違いが見られるかを観察し、現状分析した。大学生 154 名を対象として 2 種のテストを実施した。まず JACET8000 の Level 1~5 の語を Level ごとに 4 語ずつランダムに抽出し、テスト 1 では音声で提示し、その訳語を 4 択から選ぶ形式とした。テスト 2 では同じ単語を文字で提示し、訳語を選択する形式とした。その結果、いずれのテストでも Level が上がるほど、正答率は下がり、解答速度が遅くなる傾向にあることがわかった。また、Level が上がるほど両テスト間の正答率の差が大き</p>

くなる傾向が見られた。これらのことから、語彙学習時における音声によるインプットと反応速度の重要性について、より一層強調する必要があることなどが確認された。

研究発表7 日本語 Research Paper 7 (Japanese)

岡本 真由美 OKAMOTO, Mayumi

関西大学 Kansai University

専任教員 単独

日本人大学生の言語形式の選択能力に関する一考察

A Study on the Ability of Japanese University Students to Select the Appropriate English Expressions

本研究は、大学生が有する言語形式の選択能力を調査することを目的とした。リサーチクエスチョンは、①大学生は言語形式の選択能力をどの程度持っているか、②大学生の習熟度レベルと彼らの言語形式の選択能力との間に関連性があるか、とした。調査は、非英語専攻の大学1～3年生の約400人を対象とした。彼らに、時制、態、文構造などに関する選択テストに回答させ、また、その回答理由も記述させた。結果として、テストの平均正答率は50%を越えるものであったが、適切な選択理由をあげた正答の割合は12%未満で大学生の言語形式の選択に関する理解度の低さが観察された。また、習熟度レベルと正答率との関連性も低く、大学入学以前には言語形式の選択が指導されていないことが推察された。以上の調査結果から、発信のための文法指導やテストのあり方について考察したい。

研究発表8 日本語 Research Paper 8 (Japanese)

仁科 恭徳

NISHINA, Yasunori

神戸学院大学

Kobe Gakuin University

専任教員 単独

ポップ・カルチャー型教材の効用に関する理論モデルの構築

Constructing the Theoretical Model of the Effects by "Pop Culture" Materials in English Language Classes

映画・音楽などの教材を授業内で活用することで、どのような効用があるのだろうか。本研究では、暗黙ではあるが研究レベルで未だ明確に確認されていないこの効用を明らかにし、今後の映画英語教材の開発時に参考となる提案を試みる。具体的には、TOEFL-ITP400点前後の大学生83名に実施した自由記述式アンケートのデータを「修正版グランデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)」(木下, 2003)を用いて分析し、その効用に関する理論モデルの構築を試みた。尚、本研究では、映画・ポピュラー音楽を一般大衆が広く好む大衆向け文化の総称として「ポップ・カルチャー」と呼ぶことにする。

研究発表9 日本語 Research Paper 9 (Japanese)

加藤 雅之 KATO, Masayuki

神戸大学 Kobe University

専任教員 単独

World Englishes Paradigm における二つの根本概念

Two Fundamental Concepts of World Englishes Paradigm

今や World Englishes Paradigm (WEP)は袋小路に陥っている。これが Saraceni(2015)の批判的問題提起である。かつて誰もが Received Pronunciation や General American の規範を当然のこととみなし、自らを broken と規定していた時代、Englishes という用語はそれだけで何かが変わるような予感を惹起する反権威的、革命的コンセプトだった。しかし、人権や環境問題の概念を取り込み(appropriation)ながら、自らが今では一つの権威となりおおせた (World Englishes を冠した学位の登場が雄弁な証拠である)。マルクスの上位・下部構造の定立にも似て、Kachru の三つの同心円が不変の事実のように 21 世紀の論文の冒頭を飾り続けるという状況は WEP にとって幸せなのだろうか？ 本発表では WEP における「英語」の中に相互理解と、(規範への反抗の結果としての) 相互理解からの逃避 (アイデンティティへの執着) という相矛盾するベクトルが存在すること、および WEP はすぐれてイデオロギー的構築物であるという二つの根本問題について検討したい。

実践報告 Practical Report

実践報告 1 日本語 Practical Report 1 (Japanese)

松田 早恵 MATSUDA, Sae

摂南大学 Setsunan University

専任教員 単独

多読のきっかけ作り：選択科目としての多読授業実践報告

Introduction to Extensive Reading: An Elective Course

Takase (2008) は、授業中に読む時間を与えることが多読成功への鍵であると述べているが、本発表では 2014 年度後期に実施した選択科目としての多読授業を報告する。英語の本をほとんど読んでいない学生 20 名を対象に、100 冊 5 万語以上を目標に取り組んだ。授業時間の前半は、CALL 教室でその日に読むシリーズの紹介や季節やテーマで選んだ絵本の読み聞かせ・輪読・ペア読みなどを行い、YouTube 音声を使った (絵) 本の聴き読みも試した。後半は図書館に移動し、グループ閲覧室で教員が選んだ図書や学生が選んだ図書を残り時間で読んだ。7 週目と 8 週目には個人面談を実施し、進捗状況や読み方を確認した。また、学期末にはお勧めの本を紹介する POP 作成も課した。授業参加、語数、冊数、学期初めと終わりに実施した EPER テストの伸び、POP の出来などを総合的に評価した。ほとんどの学生が目標を達成し、EPER テストでも伸びを示した。人気のあった本やポップの例なども紹介したい。

実践報告 2 日本語 Practical Report 2 (Japanese)

石井 研司 ISHII, Kenji

立命館大学 Ritsumeikan University

専任教員 単独

アカデミックライティング授業において協働学習とピア評価が自己効力感に及ぼす影響：授業デザイン

のモデル化を目指して

The Dual Influence of Peer Evaluation and Collaborative Learning on Self-efficacy in an EFL Academic Writing Class: A Pilot Investigation for Designing an Effective Model

近年協働学習の効果が期待されている一方、学習意欲に影響を与える自己効力感の改善を図った授業実践は十分に成されてきたとは言い難い。そこで本実践では、英語力の異なる学生がいるクラスにおいて協働学習を取り入れたライティング授業が学生の自己効力感に及ぼす影響を検討した。四年制の大学に通う大学生 70 名を対象に、12 項目からなる自己効力感に関する質問紙調査を授業初回と最終回に行った。授業では、偶数週にライティングスタイルの諸特徴やポイントの説明→協働学習活動→課題提出、奇数週にライティング草稿のピア評価→協働学習活動→課題提出という一連の流れで一学期間行った。質問紙は因子分析を行い事前・事後による得点の違いを検討した結果、自己効力感の得点の変化が確認された。一方で、学生のコメントからは協働学習に関する問題が授業後のコメントから明らかになった。最後に今後のモデル化を目指して利点と欠点および課題を検討する。

実践報告 3 英語 Practical Report 3 (English)

BROWN, Sanborn

ブラウン サンボーン

大阪教育大学 Osaka Kyoiku University

専任教員 単独

Thesis Advising for Students Writing in English

英語で書く論文の準備と指導

Students at a national university X in western Japan must write a thesis in order to graduate. The length of the completed paper is roughly 12,500-15,000 words in English (according to departmental guidelines: "30 A4 pages"). That count does not include the cover page, table of contents, Japanese summary, or the bibliography.

In this presentation, I will discuss 1) how to prepare the students to write such a paper, and 2) the actual hands-on guidance of the writing of the paper.

Students majoring in English in the liberal arts division rarely have to write a thesis-style paper. They give presentations, take tests, write "reports," and many participate in student teaching. However, almost none has experience in writing a paper with citations and bibliography in Japanese.

In their final year, they are then confronted with having to write a 30-page paper in English that contains citations, avoids plagiarism, and is reasonably well organized and argued.

For those students who enter my "zemi," the first semester is a review of Eigo IIb and, concurrently, time spent finding sources. The fall semester is spent writing and rewriting.

This talk will cover the details of the thesis itself and what I hope to enable the students to accomplish over the course of two semesters: creating a feasible topic, finding sources, taking notes citing, outlining, avoiding plagiarism, bibliography writing, and more

実践報告 4 英語 Practical Report 4 (English)

HERKE, Michael ハーキー・マイケル

摂南大学 Setsunan University

専任教員 単独

The Grammar and Vocabulary of Film

映画の文法と語彙

Language teachers and students alike are drawn to movies as texts for study in and out of the classroom. Beyond their linguistic merits, films as a cultural product offer a vicarious experience thus far unparalleled in other media. Movies are spectacular compared to the textbook and the next best thing to being there. And it would seem the language student in particular has - theoretically, at least - wider access to the world contained in the foreign language film due to the apparent ease with which movies are understood as well as his or her linguistic knowledge. And yet film, as theorist Christian Metz points out, is difficult to explain because it is so easy to understand. In the language classroom in particular, the cinema has fallen victim to this easiness. This ease of understanding has led to movies being underutilized as a resource in the English language classroom.

Particularly since the advent of semiotics, movie theorists have paralleled the study of film with that of spoken language. Yet film is not a language, but it is like a language in many ways. This presentation explains how teachers can draw on the linguistic and film knowledge that students possess as well as how to bring attention to the ways in which filmmakers make meaning in the cinema, including denotative and connotative meanings, metonymy and synecdoche. Scenes from films will be analyzed and participants will be able to use simple film analysis in their own classrooms.